第一章：戦争の舞台

ギルザイの首長は返書してきた：「私たちの道は狭く、険しい。
太陽が谷を激しく焦がし、雪解け水が深い谷を流れる／
・・・・・・・・・・・・・・
したがって、客人には安心できる護衛と勇敢な友人の誓いが必要である。」
「アミール（＊イスラム圏の首長）の伝言」A・ライアル卿

インドの北と北西の国境に沿って、ヒマラヤが横たわっている。ヒマラヤは混沌とした時代の変動が作り出した地表の最大の障害物である。幅約四〇〇マイル、長さ一六〇〇マイルを超えるこの山岳地帯は、南部の大平原と中央アジアのそれを分割しており、イギリスの東帝国とロシアのそれを海峡の対岸のごとく引き離している。この地面の混乱の西端は、ヒンズークシュの峰々によって形成されており、その南が本書の物語の舞台である。ヒマラヤは線ではなく、山々の巨大な国である。ディリ、スワット、あるいはバジャウルに聳え立つ峠または見晴らしのよい地点に立つなら、山脈に続く山脈は大西洋の大波の長いうねりのように見え、より高くはるかに輝く雪のピークは白い波頭を頂いた大波を連想させるであろう。毎年の土砂降りの雨が丘の側面から土壌を洗い流し、無数の水路がそこに奇妙な溝を掘っている。そして黒い太古の岩がいたるところに露出している。沈泥と堆積物は、間にある谷を埋め、その表面を砂だらけに、水平に、そして広々とさせた。再び雨はこの柔らかな堆積物の中に広く、深く、絶えず変化する水路を作った／時に深さ七〇フィート、幅二〇〇から三〇〇ヤードにもなる大きな溝である。これがヌラーである。通常、小さいものは乾燥しており、大きいものでも小川が流れているだけである／しかし、雨の季節には豊富な水量がすべてを飲み込み、数時間で小川は通行不能な急流になり、川は波打つ洪水のように膨張し、渦巻いて土手を丸くくり抜き、水路を年々深く切り込むのである。

丘は谷の平原から急に立ち上がっている。その険しく荒削りな斜面は一面に厚い大岩に覆われていて、粗く草が生い茂っている。高い尾根の上にはまばらに松が生えている。ロンドンの広場やパリの並木道のプラタナスの美しい東洋品種であるスズカケノキが水路に時折見られ、快適な日陰をもたらすため感謝され重んぜられている。狭いテラスの段が丘のずっと上まで続いている。主にそれを作ったのは既に忘れられて久しい人々である。それは雨が運び去ろうとする土壌を捕え、大麦とトウモロコシの作物の収穫高を支えている。川の両岸に沿った水田は幅広く曲がりくねった鮮やかな緑地をなしており、目にとっては山々のくすんだ色合いからの唯一の救いとなっている。

実際、谷は春にはたくさんの花々で輝く―野生のチューリップ、シャクヤク、クロッカ

ス、数種類のポリアンサス／そして果物の中ではその生産において人の手が加わっていないにもかかわらずスイカ、いくらかの小さなブドウや桑の実は素晴らしい。しかし本書に記述されている遠征の期間中は夏の暑い太陽がすべての花々を焼き尽くしていた。光の中で青と緑の羽が玉虫のように色を変えるほんの数羽の見事な蝶だけが風景の厳しさと対照的であった。

しかしそれでも谷は決してやせ地ではない。土壌は肥沃で、雨は豊富で、土地のかなりの部分が耕作に充てられており、住民の欲求を十分に満たしている。

小川は魚、マスとマーシー（＊コイ科の魚）でいっぱいである。岸辺にはコガモ、ヒドリガモ、野生のアヒル、そしていくらかの場所ではシギが豊富である。丘の上ではヤマウズラの一種であるイワシャコと数種類のキジが入手できる。

狩人は地域の野生動物の中では黒や茶色のマウンテン・ベア、時々はヒョウ、マーコール（＊らせん状に角がねじれたヤギ）、および数種類の野生のヤギ、ヒツジ、カモシカを追いかけるであろう。小さい四足動物にはウサギ、毛皮の色がずっと明るい以外はイギリスの種とそっくりなアカギツネ、数種類のネズミがいる。その中にはとても興味深く希少な種もいる。美しさには乏しいが、用途がなくもないセンザンコウが頻繁に見られる／しかし、すべての動物の中で最もよく見かけるのは、長さ約三フィートの大トカゲの不愉快な種であって、たるんだ肌のワニに似ており、腐肉を食べている。ニワトリ、山羊、羊、牛と不可避のハゲタカ、時折のワシが動物相を完成させている。

その全ての上にはまぶしく青い空と力強い太陽がある。これが戦争の舞台である。

これらの未開ではあるが豊かな谷には多くの部族が住んでいるが、どれも似たような性格と境遇である。暖かい太陽と豊富な雨が肥沃な土壌に育てるふんだんな作物に支えられ、多くの人々は余暇を好戦的に過ごしている。種まきと収穫の時を除いて、土地全体に確執と紛争の絶えない状態がはびこっている。部族は部族と戦う。ある谷の人々は隣の谷の人々と戦う。共同体同士の喧嘩に個人の戦闘が加わる。それぞれ郎党に支えられているカーン（＊中央アジアの王族、貴族）がカーンを襲撃する。すべての部族民はその隣人に血の宿怨を抱いている。すべての男の手は他の男に、そしてすべての手は余所者に向けられている。

これらの闘争はまた、そうした発達段階の種族が通常持っているような武器を用いて行われるのではない。ズールーの凶暴さにアメリカインディアンの術策とボーアの射撃が追加されるのである。その世界は「慈悲なき文明の力」というぞっとするような光景を呈す

る。千ヤード先の旅行者は後装式ライフルのよく狙いを定めた弾丸に撃たれて倒れる。襲撃者が近づき、南海の島民の凶暴さで彼を叩き切って殺す。一九世紀の武器が石器時代の野蛮人の手に渡っているのである。

男たちの間の殺人の意図を誘発するあらゆる感化、あらゆる誘因が、この山岳民族を裏切りと暴力に駆り立てる。すべての人間が受け継いでいる太古からの強い殺人性向はこれらの谷で他に例がないほどの強さと勢いで保存されている。何よりその宗教は、とりわけ剣によって設立され広められたものであり―その教義と原理には、虐殺への動機が漲っており、三つの大陸で戦闘種族を生み出した―野蛮で無慈悲な狂信を鼓舞している。常に山岳民族の特徴である略奪への愛は、その目に絢爛で贅沢に見える南部の都市と平野の光景によって育まれている。昔のスペインと同じくらい堅苦しくなくはない礼儀が、コルシカのそれと同程度に執念深いヴァンデッタ（＊何代にもわたる家同士の血の報復）によって守られていた。

そのような社会の状態においては、すべての財産は直接力づくで所有される。すべての男は戦士である。彼はどこかのカーン―かつての封建領主の重騎兵のようなもの―の郎党であるか、あるいは―中世の市民にあたる―自分の村の軍隊の一人である。そのような環境においてはある野心的なパシャン人の栄枯盛衰を簡単に辿ることができる。彼は最初、前の持ち主を追い出して以来家族が持っていた小さな土地で、農業家として熱意を持って倹約しながらせっせと働く。そして秘密裏に金をためる。これで彼はライフルを購入する。大胆な泥棒がその命を危険にさらして辺境守備隊宿舎から盗んできたものである。彼は恐れられる人物になる。そして自分の家に塔を建て、周囲の村人を威圧するようになる。村人は徐々にその権威に服従するようになる。いま彼は村を支配しているのかもしれない／しかし目指しているのはさらなる高みである。彼は地元のカーンの城への攻撃に参加するよう隣人を説得、あるいは強制する。攻撃は成功する。カーンは逃げるか殺される／城は奪取される。郎党は征服者と折り合いをつける。土地の保有は封建的である。その土地と引き換えに彼らは新しい首長に従って戦争に行く。もし彼が郎党を他のカーンが従者を扱うより悪く扱うならば、彼らは強力な武器を他のどこかに売ってしまうであろう。彼は郎党を大切にする。他の人々も頼って来るようになる。より多くのライフルを購入する。そして二―三人の隣りあうカーンを征服する。今や彼は権力者となった。

多くの、おそらくすべての国が同様の方法で設立されたのであり、文明がその初期に苦しみ、よろめくのはこのような段階においてである。しかし、これらの谷では、人々の好戦的性質とその支配に対する憎しみが、発達のさらなる進展を阻害している。私たちは有能で、倹約家で、勇敢で、権力への道を戦い、吸収し、合併して、より複雑で相互依存的な社会の基礎を築こうとしている男を見てきた。彼はこれまでのところは成功している。

しかし、その成功は今や破滅となる。彼に対抗する連合体が形づくられる。周囲の首長とその支持者は村の人々に支援されている。数に圧迫されて野心的なパシャン人は滅ぼされる。勝者は戦利品をめぐって争い、そして物語は始まったときと同じく流血と争いの中で幕を閉じる。

生存の条件がこのようであるため、当然これらの部族はその居住地を要塞化してきた。谷にある場合、それは塔と小銃の銃眼のある壁によって守られている。丘のくぼみにある場合はその位置自体が有利である。どちらにしてもそれはよく武装し、勇敢で、絶え間ない戦争によって鍛えられている頑丈で好戦的な人々によって守られている。

この絶え間のない混乱の状態から、怪我を厭わず、命を軽んじ、不注意に軽率に戦争に乗り出すという習慣が生まれた。そしてアフガン国境の部族民が激情なしに戦い、かっとなることもなく他人を殺す光景が見られるようになる。このような気質は、あらゆる形の法と権威に対する敬意の絶対的な欠如と相まって、完全な対等の確信と相まって、イギリスの権力との頻繁ないざこざの原因となっている。ささいなことがその敵意を呼び起こす。彼らはある辺境の駐屯地に突然攻撃を加える。そして撃退される。彼らの視点においては事件は終わりである。自分たちが最悪の運命をたどったフェアな戦いがあっただけである。彼らを困惑させるのは、サーカー（＊インド政府）」がそうした小さな出来事を重く見ることである。例えばモーマンド族が辺境を渡ってシャブカドルの戦闘が起こった。彼らは、政府が勝利に満足することなく、自分たちの領域に侵入し、罰を課そうとしていることに驚き、そして悲しむ。あるいはマムンド族は村を焼かれたため、第二旅団のキャンプを夜襲する。これで引き分けである。軍隊がそうした見解を受け入れないことに彼らはびっくり仰天する。

彼らは互いに戦うとき、悪意をもっておらず、戦闘員が仲間の屍を越えて友人になったり、祭りや競馬のために作戦を中断したりすることは珍しいことではない。抗争が終わればたちまち誠心誠意の関係が再び確立される。それでも非常に矛盾に満ちているのが彼らの性格であり、これらすべてが、その家族のヴェンデッタと個人的な流血の確執について書いたことを損なうことはない。裏切りと暴力を悪徳ではなく美徳と見なす彼らの論理は、非常に奇妙で一貫性のない名誉の規定を生み出しており、論理的な精神では理解できない。もし白人がそれを完全に把握できて、彼らの心的衝動を理解するなら―いつ彼の味方をすることが彼らの名誉であり、そしていつ彼を裏切るのが彼らの名誉であるか／いつ彼らは彼を守るべきか、そしていつ殺すべきかをもし彼が知っているなら―彼は、その時と機会を判断して、山の端から端まで安全に通り抜けられるかもしれない。しかし、文明化されたヨーロッパ人がこれを達成することはほとんどできない。水滴を顕微鏡で覗き込んだ時に観察される、お互いを和やかにガツガツと喰らい、満足そうに貪り食われる奇妙な生物

を理解できないように。

私はパシャン人の特性の中の好ましいものについて喜んで述べたい。それはパシャン人の終わりない乱闘の中において、粗野な騎士道精神が命ずるところの女性の特権である。多くの砦は小さな池や泉から少し離れたところに建てられている。包囲中、攻撃側は女性が夜間に壁の足部に水を持っていくことを許す。朝に守備側は出てきてそれを—もちろん銃火の下で—取り、抵抗を続けることができる。しかし、生活の軍事的な側面から社会的側面に目を移すなら、女性たちの置かれた状況にはより暗い影が差しており、どんな埋め合わせを以てしても救われることはない。私たちは彼女らが人類の周縁にいる劣化した民族のように、汚れと無知の中で、そのむさ苦しく銃眼のある陋屋にいるのを見る。トラのように獰猛であるがきれい好きではない／危険ではあるが優雅ではない。理想主義者が通常原始的な人々に帰する単純な家族の美徳には著しく欠けている。一般に彼らの妻と女性たちには動物のような地位しかない。彼女らは自由に売買され、ライフルと交換されることすら稀ではない。彼らは真理を知らない。一つの典型的な挿話において彼らが宣誓というものをどのように考えているかがわかる。畑の境界の論争において双方の申立人はコーランを手に持ち、自分の土地の上だけを歩くことを誓って、自らの主張する境界線を一周する習慣がある。しかし隣人の土地の上を歩くときには誓いが偽りにならないように自分の畑のホコリを少し靴の底に入れておくのである。双方がそうしたペテンに精通しているため、宣誓のひどい茶番はすぐに放棄されて力に訴えることになる。

すべてが悲惨な迷信の支配下に置かれている。ジアラット（＊イスラム神殿）、あるいは神聖な墓の力は驚くべきものである。病気の子供たちは水牛の背中に乗せられて、時には六〇—七〇マイルも運ばれて、そうした神社の前に置かれ、そして—もし彼らが旅の途中で死ななかったなら—同じようにして運び戻されるのである。惨めな子供がこうして牛の背中に揺さぶられて苦しんでいるのは考えるだけでも痛ましいことである。しかし、部族民はこの治療をどの異教徒の処方薬よりもはるかに効果的だと考えている。願いの成就を確実にするにはジアラットに行って地面に棒を置けば十分である。立派な男子の跡継ぎを得るための確かな方法は、ファキールがそこに縛りつけた、木にぶら下がっている石や色のついたガラス玉を座って振ることである。牛に良い乳を出させるには、聖人の墓の近くにある気に入った石の上に少し漆喰を塗る必要がある。これらはほんの数例である／しかし、それは文明世界が笑うべきか泣くべきかさえわからない精神的発達の状態を明らかにするには十分かもしれない。

彼らはその迷信によって数多くの聖職者の強欲と圧制にさらされる。すなわち「ムラー」、「サヒブザダ」、「アクンザダ」、「ファキール」そしてトルコで言うところの神学生に相当する、人々を犠牲にして自由に生きる、放浪するタリブ・ウル・イルムの群れといった連

中である。さらに彼らは一種の「ドロワ・デュ・セニョール（＊初夜権）」を持っており、どんな男の妻や娘もそれから安全ではない。そのマナーやモラルのいくつかは書くことも憚られるほどである。マコーレーがワイチェリーの戯曲について「スカンクがハンターに撃たれないように、彼らは批評家に叩かれない。」と言ったように、彼らは「安全である。なぜなら汚なすぎて手を触れることができず、臭すぎて近づくことすらできないからである。」

それでも、これらの野蛮な人々の生活にさえ、絵のように美しいものを愛する人がその期待と不安に共感する瞬間がないわけではない。夕方の涼しさの中で、アフガニスタンの山の後ろに太陽が沈み、渓谷がとても気持ちのよい薄明に満ちているとき、村の長老たちが水辺のスズカケノキの元へと連れて行ってくれる。そこで男たちがライフルの手入れをするか水タバコを吸い、女たちがビーズや丁子、木の実で粗末な飾りを作っているときに、ムラーが夕方の祈りを唸るのである。白人はこうした様子をほとんど見たことがなく、帰国後に語ったこともない。しかし武器や牛の価格、収穫の見通し、村のゴシップから、南にあって年々近づいてくる大国にいたるまでの会話を私たちは想像できるだろう。おそらく、ベルチスまたはパシャンの元セポイがペシャワルのバザールでの自らの冒険を列挙したり、過去に自分が付き従って戦った白人将校たちについて語ったりするであろう。その飾らない勇気やその奇妙なスポーツについて／毎月の恩給をきちんと送ることを決して忘れない政府の遠大な力について語るであろう／そして、聴衆の輪に向かって自分たちの谷がその偉大な組織の広範囲な支配に巻き込まれ、裁判官、収税官、弁務官がアンベイラ（＊ブナーの村）の会合に馬で乗りつけたり、ナワガイ（＊後出のナワガイとは別のアンベイラ近郊の村）の土地の地租を見積ったりする日のことさえ予言するかもしれない。そのときムラーは声を上げ、預言者の息子たちがインドの平原から異教徒を追い出し、デリーにおいてカフィール（＊異教徒）が今支配しているのと同じくらい広い帝国を支配していた他日を思い出させる：真の宗教が地上を闊歩し、丘の間に隠れて無視されることを軽蔑していた日を：強大なプリンス（＊小君主）たちがバグダッドを支配し、すべての人々が神は一でありマホメットがその預言者であることを知っていた日を。そして、これを聞いていた若者たちはマティーニ銃を握りつつアッラーに祈るであろう。いつの日か、我が視線の七〇〇ヤード先に―最高の獲物である―サヒブ（＊インドで白人につける敬称）を横切らせ給え、さすれば侮辱され脅迫されたイスラムのためにせめて一撃を加えん、と。

この国の全体的な様相とその住民の性格をこのように簡単に述べた。この段階では、詳細に進む必要はない。記事が進むにつれて読者はくすんだ山々、そしてその影の中に住む人々のより生々しい印象を受けるであろう。

私が語るべき物語は辺境戦争の一つである。問題の重要性も、戦闘員の数も、ヨーロッ

パの規模ではない。その結果に諸帝国の運命がかかってはいない。しかし、物語に興味深さや内省の素材がないとはいえないであろう。文明国の紛争においては何千人もの大軍がぶつかり合う。旅団と大隊は前方に急行させられ、おそらく射撃地帯に入って砲列の集中または大量の小銃で掃討される。数百人―数千人が死亡し、負傷する。生存者たちは闇雲に、呆然として、動転して、最も近い遮蔽物へとあがく。後ろから絶えず新たな兵が投入される。やがてどちらかが屈する。すべてのこの混乱、この大規模虐殺の中では個人とその感情は完全に失われている。語るべき物語を持っているのは軍だけである。そうした規模の出来事の中では人間の期待と不安、強さと弱さは等しく見分けがつかない。喧騒とホコリの中で破壊以外のものは何も見られない。しかし辺境では、朝の澄んだ光の中で、山肌に煙のパフが点在し、すべての尾根がまぶしい剣の刃で輝いているとき、観察者は人間の勇気のすべての段階を観察し、的確に評価するであろう―ガジ（＊イスラム戦士）の野蛮な狂信、シーク教徒の静穏な運命論、イギリス兵の頑固さ、そしてその将校たちの自信に満ちた不敵さを。そして献身と自己犠牲、クールな皮肉と断固たる決断の時に気づくであろう。感激の瞬間を、あるいは獰猛な怒りと落胆を共有するであろう。将軍の技能、兵士の質、軍事技術の永遠の原理は、歴史的に有名な戦場と同様に明瞭に発揮される。統計的規模が縮小されるだけである。

一杯のシャンパンは爽快感を与える。神経は引き締められ、想像力は愉快に掻き立てられ、機知はより軽快になる。一本のボトルは逆の効果を生み出す。過ごせば人事不省の昏睡状態を引き起こす。戦争についてもそうであり、両者の特質はすすったときに最も良く知ることができる。

私はマラカンド野戦軍の軍事作戦を記録し、その政治的成果をたどり、可能であれば、インド高地の風景と人々の描写をするつもりである。本書は、勇敢で熟練した兵士の行動を記録するのに役立つであろう。それは辺境戦争の大きなドラマに側面光を当てるであろう。それは私たちの民族の永遠の継承物である帝国のための絶え間ない闘争の中の一エピソードを記録するであろう。暇つぶしになるであろう。しかし私がそれによって叶えようとしている野心は、帝国主義的民主主義のイギリスが海の向こうにあるその大きな財産に対して持ち始めている関心の高まりを多少なりとも、少しであったとしても、刺激することである。